「パレスチナ人の悲惨を想う」　2023年10月30日

紀元70年にエルサレムはローマ軍に包囲され、兵糧攻めに遭って、無残に崩壊した。以来、ユダヤ人は国家を失い、ヨーロッパを中心に世界中に、国土を持たない民族として散らざるを得なかった。ところが、1948年に国連はイスラエル国家の樹立を認め、イスラエル国がパレスチナに誕生した。驚くべき民族意識であるが、そこには、第二次世界大戦の影響と、当時の無責任な政治力学が働いていた。パレスチナ人にとっては突然、自分たちの地域の半分くらいの領域を奪われて、イスラエル国が誕生したのだから、承服することはできない。両者の間で、激しい戦いが起こった。しかし、イスラエルは圧倒的な軍事力で国力を強化していった。以来、パレスチナとイスラエルの闘いは止むことがなく、二国の共存が模索されたオスロ合意があった。しかし、オスロ合意は破綻し、イスラエルの力の前にパレスチナは抑圧され続けてきた。ヨルダン川西岸のパレスチナ人自治区にはイスラエル人の無謀な入植が進んでいる。ガザ地区は分離壁で封じられて「天井のない監獄」と言われている。1900年ぶりに国家を取得したイスラエル人は、国家を失うと民族の存亡が危ういと必死で、それこそ命を懸けて国家を守ろうとしている。これを支えるのが、米国の政治、経済、文化において強力を持つユダヤ人ロビーである。そして、4000年前、神がアブラハムに「この土地をあなたと子孫に与える」と書かれた聖書の言葉から、パレスチナはイスラエル人のものであると信じる、米国で共和党を支える福音派と言われる25％の集票力を持つクリスチャンである。軍事力では、アメリカンリーグとリトルリーグほどの差があるので、パレスチナ人が少しでも反抗すると、10倍以上の反撃を受け続けてきた。

アラファトとラビンによる平和的な政治状況の時、教会員でツアーを組み、イスラエル旅行に行った。旅行はイスラエルに利することであるという批判がある。私は、パレスチナ人教会を訪ねたいと旅行社に申し込み、ベツレヘムのルター派の『私はパレスチナ人クリスチャン』を著したミトリ・ラヘブ師の牧する教会に行くことができた。道幅が狭く、信号機もなく、インフラ整備はイスラエルとは格段の違いがあった。ラヘブ師が「私たちは2000年来、この地に住むクリスチャンです」と言われた言葉が印象深かった。

10月7日、ガザを実効支配するハマスは突然、数千発のロケット弾をイスラエルに打ち込み、戦闘員が分離壁を乗り越えイスラエルに侵入し、1500人以上を殺害し、200人ほどを人質にした。まず、驚いた。こんな奇襲をすれば、何十倍もの報復を受けることは目に見えているからである。イスラエルは、米国の9・11同時多発テロと同じだと、ミサイルを連日撃ち込んだ。これまでは、ミサイルをどこそこに撃つので退避するようにとの連絡があったそうだが、今回は見境いなく、医療施設、学校、宗教施設なども猛爆している。死者数は既にイスラエル人の数倍に達している。ガザは分離壁で囲まれているので、一般市民は逃げ出る場所がなく、また、支援物資も少なく、1900年前のエルサレムと同じように兵糧攻めに遭っている。こんな残酷なことはない。ハマスは、壁で囲まれた生活に我慢できなくなったのか、アラブの団結を誇った「アラブの大義」が壊され、イスラエルとアラブ諸国との国交樹立が進み、パレスチナが取り残されることを焦ったのか。どんな理由であれ、ハマスの奇襲は許されない。ただ、パレスチナ人が置かれた悲惨な状況を世界に知らしめたことは確かである。イスラエル兵がガザに突入したら、無辜の人々が無為、無残に殺され、生き地獄の状態になる。出口は全く見えないが、力あるイスラエルが自制し、後ろ盾の米国は人道的な対応を示すべきである。ウクライナとパレスチナにおける理不尽な武力行使は絶えない悲しみと憎悪を生み出すだけで、即時停戦が世界の祈りである。